Ⅳ-241　都市デザインにおけるオブジェの意義に関する基礎的研究

環境庁　正員　柴田恵子
東京工業大学　社会工学科　正員　中村良夫
東京工業大学　社会工学科　正員　斎藤潮

1．研究の背景・問題提起

昨今、彫刻作品や、それに類する造形物（オブジェと総称しよう）を都市に設置する試みが多数みられるようになった。しかし、それらの中には、意味的な整合性を欠いたり、大きさが周辺のしつらいとはアンバランスであったり、というように、野放図におかれたものも多く見受けられるのが現状である。

本研究では、オブジェを都市に設置する際には、その設置場所とのつながりを重視し、場所の「鍵」としての作用をもたせるべきだ、と考え、そうした作用をもつオブジェを、「キー・オブジェ」として取り上げる。そして、都市の秩序や調和といった概念を踏まえたキー・オブジェのあり方を考え、都市デザインの重要な一手法として提起したい。

分析に必要な事例は、自分自身の探索、人からの伝聞、文献などを手がかりとして収集した。そして、東京、横浜、名古屋、長崎等の都市にある事例をできるだけ多く収集し、写真撮影と実測によって記録した。

2．オブジェに導入されるべき調和概念

オブジェが設置される都市という空間は、複数の人間が集住する空間である。そこで、人々に対する「もてなしの心」を調和の基本原理とする茶道を参照しながら、本研究は、キー・オブジェが前提とすべき調和原理を構築することにした。

茶道における調和原理は大きく三つに分類することが出来る。そこで、本研究では、キー・オブジェが前提とすべき調和原理を表１のごとく設定した。

3．意味

A．意味の共有の契機：キー・オブジェが設置場所と特定の意味をいかにして共有しうるかに着目して、収集した事例の特徴を抽出し、分類した。その分類を、表２に示す。

B．意味の連関：キー・オブジェがどのような場所に「鍵」としての意味をもつか、を、キー・オブジェの《連関》として捉え、キー・オブジェと意味を共有する場所を＜連関先＞と呼ぶことにした。

あるキー・オブジェを取り上げたとき、そのキー・オブジェの＜連関先＞には、ヴァリエーションが有り得る。キー・オブジェの内包する（あるいは外延の）意味の種類に応じ、連関先のヴァリエーションは多かったり、限定されたりする。

C．調査：A・Bを確かめるために、アンケート調査、面接調査を行い、結果を連関図にまとめた。

表１：茶道の道具の調和原理を手がかりとしたキー・オブジェの調和原理

茶道の道具	キー・オブジェ
「季節」の調和	「意味」の調和
茶室の広さとのバランス	周辺とのスケールバランス
道具の揃い方	質感の調和

表２：キー・オブジェと場所との調和型式と調和の手がかり

調和型式	調和の手がかり	調和の特色・効果
隠喩型	オブジェの内包（外延）する意味と設置場所の内包（外延）する意味との類似性	場所とオブジェの類似性を見つけ出す謎ときに人々が参加し、知的好奇心を満足させることで場所を印象づける。
換喩型	場所への所属物に対するオブジェのイコン性（場所に関するオブジェのインデックス性）	場所の内容が、その一部分を提示することによって強調され、印象づけられる。
由来型	場所の時間的（歴史的）意味に関するオブジェのインデックス性	場所の時間的意味が、銘板等の補助を受けて強調され、印象づけられる。
代行型	場所の使い方、場所における行動に関するオブジェのインデックス性	場所の使い方（場所の機能）がユーモラスに印象づけられる。
駄洒落型	オブジェのシニフィアンと場所の名称、使われ方の名称との音の共有	場所やその使われ方（の名称）がユーモラスに印象づけられる。
対句型	二つのオブジェと二つの場所との意味上の呼応関係の対応	二つの場所の呼応関係、または二つの場所の間の空間の存在を強調する。
対義結合型	場所とオブジェとの意味上の、過念的な対義関係の対応	対義の強調によって場所の本義を婉曲に示す。
ルビ	標題は、普語体系の持つコードの拘束力を背景に、他の調和形式と併用されることによって、オブジェと設置場所の結び付きを浮かび出させる効果を持つ。	

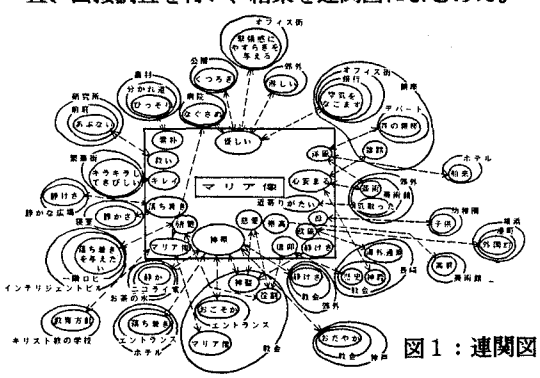

図１：連関図

（例）；マリア像から連想される意味と、場所から連想される意味との結び付き

４．スケールバランス

設置場所とオブジェの関係においてスケールの点で問題となるのは、単純にオブジェ自身の大小や、台座との大きさ、及び、ボリュームの比率ではない。都市の中におかれる以上、オブジェは、それ自体の完結を越えて、設置環境との調和・適合を目指さなければならない。この点でのスケールのをスケールバランスと呼んでおく。そして、本研究ではスケールバランスを以下の二つに分類した。

Ａ．「ひき」のスケールバランス：オブジェが設置される場所のしつらいの広さとオブジェのボリュームとの間に存在するスケールバランスをこう呼ぶことにする。オブジェをみる際に「ひき」をどれだけとることができるか、をみるために、収集した事例の実測値をまとめた。

オブジェを一つの視対象として全体を視野に納めうる限界の見込み角である６０度、及び、オブジェが一つの視対象として人の注目を集めうる限界の見込み角である２０度を、オブジェの高さに対して、何m離れればとることができるか、を中心にスケールバランスを考えた。その間に設置場所のしつらいをとれば、スケールバランスの点で、オブジェは場所と適合する。

Ｂ．高さのスケールバランス：オブジェが設置される場所の周囲の建物の高さとオブジェの高さのスケールバランスをこう呼ぶことにする。周辺の建物とキー・オブジェとの間には、いわゆる釣合という観点の他に、建物自体の大きさから関心の焦点をキー・オブジェの方に移行させるという効果を前提　としたスケールバランスが考えられるのではないかと思われる。（→①）　H.Dreyfusによれば、人間が頭部を後ろに楽に反らすのは角度にして３０度までである。これに眼球部の可動範囲の３０度を加えて、仰角６０度の範囲までは、建物のスカイラインを楽に見上げることができるといえるだろう。すると、仰角が６０度以上になる建物は、眺望対象として無理があり、キー・オブジェに対して相対的に背景となるだろうと推測される。

図２はオブジェと背後の建物との視覚の関係を表す。設置場所のしつらいによって仰角が６０度をこえているケースは、①から演繹して特に建物の高さが生み出す圧迫感を和らげる効果をもつといえよう。逆に、仰角が６０度を越えないようにしつらいを作ることによって、建物自身もオブジェと同様に浮き立たせる効果を狙うこともできる。

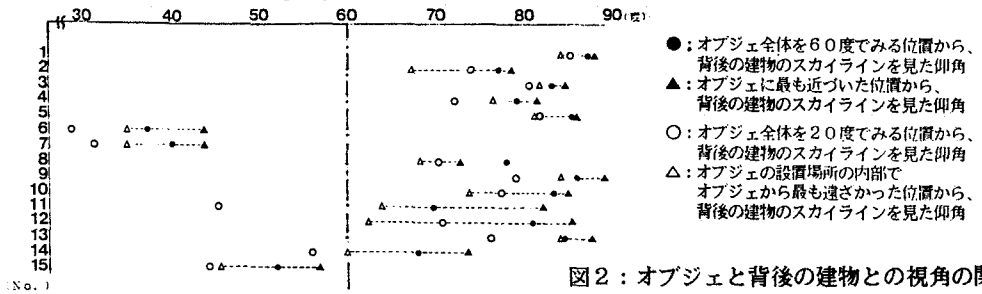

図２：オブジェと背後の建物との視角の関係

５．質感

キー・オブジェと設置場所とのつながりを質感という面で切り取ると、おもに次の二つの概念が存在する。

Ａ．連続：オブジェと周囲のしつらいとの間に、材質や色の類似性をもたせることによって、設置場所の一つのエリアとしてのまとまり感を感じさせることができる。

Ｂ．対比：キー・オブジェの素材に、周囲のしつらいとは異なった材質や色を選択して、その存在を強調する場合がある。キー・オブジェが、設置場所の中心的存在として確立すべき場合には、この、素材の対比を補助的に用いることが有効である。特に「対義結合型」においては、意味の対比を鮮明に浮き立たせる補助をなす。

６．結論

①屋外彫刻に設置場所との調和を求めるべく、茶道の調和原理をもとにキー・オブジェという概念を構築した。キー・オブジェの調和原理は、意味・スケール・質感の３側面を内包する。②意味に関しては、彫刻と場所との調和の手がかりから８つの調和形式が抽出された。意味を共有する場所（連関先）のヴァリエーション（「枠」）も構造的に提示された。③スケールに関しては、設置場所の面積に対する調和と、隣接・関連する建築に対する調和とが検討項目として提示された。④質感については、場所との単なる類似性を要請するだけでなく、意味の調和を強調するという点での位置づけもなされた。⑤以上の調和原理に従えば、屋外彫刻は設置場所のイメージを集約・代表する存在となる。このとき、屋外彫刻は単なる鑑賞対象の枠を越え、それをキーとして都市空間を景観的に再編成していくような戦術として積極的意義を持つことになる。